



デジタル印刷機「リソグラフ」について

1980年、複写機のような使い勝手の印刷機が登場したと、新聞で大きく報じられた新製品がありました。理想科学が開発したデジタル印刷機「リソグラフ」です。

それまでは、謄写版印刷機(ガリ版)や輪転機でインクで手を汚しながら印刷していました。手を汚さず、コピー機のような使い勝手で印刷できる画期的な「リソグラフ」は教育機関をはじめ、官公庁、企業、アートプリントスタジオ、コミュニティーなど日本中に広まってきました。現在では世界190以上の国や地域で活用されています。



「リソグラフ」の仕組み

印刷の元となる版に原稿どおりに孔(あな)を開け、そこにインクを通して画像を紙に転写させる印刷方式です。学校で配られるプリントや、チラシなど、1種類の原稿を高速で大量に印刷する用途に適しています。また、「リソグラフ」は一度版を作ってしまうえば数千枚印刷できるので、刷れば刷るほど1枚あたりのプリント単価が安くなります。



インクのカラーバリエーション

「リソグラフ」でのアート製作に欠かせないのがカラーインク。版画のように色を重ねたり、2色を掛け合わせてプリントすることで表現の幅が広がります。「リソグラフ」のインクは、よく使う基本色17色に加え、より多彩で個性的なカスタムカラー 50色をラインナップ。さらにご注文に応じたカラーインクを調合するオーダーカラーもあります。また、「リソグラフ」のインクは国産の米ぬか油を配合したインクです。廃棄物である米ぬかを有効利用することで、廃棄物の削減に貢献しています。

理想科学工業株式会社について

理想科学工業株式会社は、「世界に類のないものを創る」を開発ポリシーとし、ペーパーコミュニケーション分野において、独自の製品・サービスを提供する開発型企业です。理想科学は、終戦翌年の1946(昭和21)年に謄写印刷業として創業しました。現在は主力製品である、高速カラープリンター「オルフィス」とデジタル印刷機「リソグラフ」を通じて多枚数のプリントをより速く、リーズナブルに処理したいというお客様に最適なソリューションを提供しています。



リソグラフ
発売40周年映像
理想はそう、
かなえよう



「とびだせ! ガリ版印刷発信基地」

Pop-up Riso Zine Studio

Artistic Direction: Hand Saw Press (Ryoko Ando, Shinsuke Kanno)

Guest Artists: Takuo Miyanaga (producer / magamago), YUKI (bike messenger / Traffic god)

Publicity Design: Nobuyuki Eguchi

Publicity Photograph: minamiasami

Operation Assistant: Ikumi Taguchi (ikik/Hand Saw Press), Chisaki Murakami

Production Coordinators: Keisuke Shimada, Maki Fujishima (Festival/Tokyo), Maiko Iwama, Miki Kanai

In special cooperation with RISO KAGAKU CORPORATION

フェスティバル/トーキョー20
会期 令和2(2020)年10月16日(金) - 11月15日(日)
会場 東京芸術劇場/トランパル大塚/豊島区内商店街/E/T remote (オンライン会場)ほか

フェスティバル/トーキョー実行委員会

顧問 野村 高 (公社)日本芸能実演家団体協議会会長 能楽師

名誉実行委員長 高野之夫 豊島区長

実行委員長 福地茂雄 (公財)新国立劇場運営財団 顧問 (公社)企業メセナ協議会 顧問 アサヒグループホールディングス株式会社 社友

副実行委員長 市村作知雄 NPO法人アートネットワーク・ジャパン顧問 豊島区文化局長 豊島区文化工芸課長

委員 小澤弘一 (公財)としま未来文化財団 事務局長 尾崎元規 (公社)企業メセナ協議会 理事長 花王株式会社 顧問

熊倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授 アサヒグループホールディングス株式会社 日本統括本部 事業企画部 理事

中田雅史 東京商工会議所豊島支部 会長 渡邊裕之 (公財)せたがや文化財団 理事長

永井多恵子 (公財)せたがや文化財団 理事長 小倉 桂 豊島区文化商工部文化デザイン課長

蓮池奈緒子 (公財)としま未来文化財団 企画・管理 豊島区立舞台芸術交流センター) 支配人

米原晶子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 フェスティバル/トーキョー ディレクター

長島 肇 フェスティバル/トーキョー 共同ディレクター 河合千佳 フェスティバル/トーキョー 事務局長

能登絹子 豊島区総務部総務課長 監事 藤井健康、北澤尚登 (骨董通り法律事務所)

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

ディレクター 長島 肇

共同ディレクター 河合千佳

事務局長 葦原門花

制作 藤島麻希、嶋田敬介、柚木桃香、鈴木千尋、藤井友理、長田崇史、山崎昌雄、猪狩裕子、岩間麻衣子、植松侑子 (合同会社syuzgen) 、金井美希、可田由幸、萩谷早枝子、宮内芽依、宮武亜季、宮本晶子 (合同会社syuzgen)

コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)チーフ 小倉明紀子

コミュニケーションデザイン(広報/教育普及) 名取明音、岡野乃里子、細川浩伸

コミュニケーションデザイン(広報/教育普及)アシスタント 森川清成、植田あす美

票券チーフ 武井和美

渉外 太田志保

経理 堤 久美子 五藤 真、中山恭一 (株式会社countroom)

総務 米原晶子

技術監督 寅川英司

照明コーディネーター 木下尚己 (株式会社ファクター)

音響コーディネーター 相川 晶 (有限会社サウンドウィズ)

アートディレクション 高田 唯 (Allright Graphics)

デザインコーディネーター 北條 舞 (Allright Graphics)

デザイン 齊藤拓実 (Allright Graphics)

イラスト 芳賀あきな

音楽 (PR動画) 東郷清丸 (Allright Music)

PR動画 ダイノサトウ

ウェブサイト 相澤 俊 (Mtame株式会社)

海外広報・翻訳 ウィリアム・アンドリュース

作品紹介文 鈴木理映子

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会 豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO法人アートネットワーク・ジャパン、東京芸術実行委員会(豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京))

「トランスフィールド from アジア」助成 国際交流基金アジアセンターアジア・文化創造協働助成

後援 外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM

特別協力 西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、サンシャインシティ、ジュンク堂書店 池袋本店、理想科学工業株式会社、星野リゾート OMO5東京大塚

協力 東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋百貨店街連合会、特定非営利活動法人ピクチャー池袋まちづくり、ホテルトビタリタン、ホテルサンシャインシティ、池袋ホテル会、サンシャインシティプリンスホテル、ホテルソル池袋

宣伝協力 株式会社ポスターハリス・カンパニー

発行: フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒171-0031東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL: 03-5961-5202 FAX: 03-5961-5207 https://www.festival-tokyo.jp/20.html

編集: フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局 編集協力: 鈴木理映子 アートディレクション: 高田 唯 (Allright Graphics) デザイン: 山田智美 (Allright Graphics)

Festival/Tokyo 2020

Dates Friday, October 16–Sunday, November 15, 2020

Venues Tokyo Metropolitan Theatre, TRAM-PAL Otsuka, shopping streets in Toshima, online, and other locations

Festival/Tokyo Executive Committee

Advisor: Ma Nomura(Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor)

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano(Mayor of Toshima City)

Chair of the Executive Committee: Shiguo Fukuchi(Advisor, Non National Theatre Foundation; Advisor, Association for Corporate Support of the Arts; Senior Alumnus, Asahi Group Holdings, Ltd)

Vice Chairs of the Executive Committee: Sachio Ichimura(Director, NPO Arts Network Japan) Chikara Fujita(Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Koichi Ozawa(Administrative Director, Toshima Mirai Cultural Foundation)

Committee Members: Motaki Ozaki(President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kumakura(Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts) Masashi Nakata(Senior Officer, Business Planning Department, Japan Headquarters,Asahi Group Holdings, Ltd) Hiroyuki Watanabe(Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Taeko Nagai(Chair, Setagaya Arts Foundation)

Kei Ogura(Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Naoko Hasuike(Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owlspot Theatre/Toshima Performing Arts Center)

Akiko Tomihara(Representative, NPO Arts Network Japan) Kaku Nagashima(Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai(Co-Director, Festival/Tokyo) Madoka Ashihara(Administrative Director, Festival/Tokyo)

Supervisor: Kinuko Noto(Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City) Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa(Kotto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat Director: Kaku Nagashima Co-Director: Chika Kawai

Administrative Director: Madoka Ashihara Production Coordinators: Maki Fujishima, Keisuke Shimada, Momoka Yonoki, Chihiro Suzuki,Yuuri Fujii, Takashi Osada, Masao Yamagata, Yoko Igari, Maiko Iwama, Yuku Usimatsu(syuz'gen), Miki Kanai, Yoshiyuki Shida, Saeko Hagiya, Mei Miyayuchi, Aki Miyatake, Shoko Miyamoto(syuz'gen)

Communication Design Director(PR,Education & Outreach): Akiko Ogura Communication Design (PR, Education & Outreach): Mone Natori, Noriko Okano, Hironobu Hosokawa Communication Design Assistants (PR, Education & Outreach): Kiyonari Morikawa, Asumi Ueda

Ticket Manager: Kazumi Takei Liaison Officer: Shiho Ota Accounting: Kumiko Tsutsumi, countroom (Makoto Gotoh, Kyoichi Nakayama) Administrator: Akiko Yonehara

Technical Director: Eiji Torakawa Lighting Coordinator: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.) Sound Coordinator: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Director: Yui Takada (Allright Graphics) Design: Takumi Saito (Allright Graphics)

Design Coordinator: Mai Hojo (Allright Graphics) Illustrator: Akina Haga

PR Video Music: Kiyomaru Togo (Allright Music) Publicity Video: Dino Sato

Website: Shin Azawa (Mtame, Inc.) Overseas Public Relations, Translation: William Andrews Copywriting: Rieko Suzuki

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ], Tokyo Festival Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, Festival/Tokyo Executive Committee, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture [Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo])

”Transfield from Asia”Grant: The Japan Foundation Asia Center Grant Program for Promotion of Cultural Collaboration

Endorsed by the Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, J-WAVE 81.3 FM Special cooperation from SEIBU IkebukuroHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE Ikebukuro, TOBU RAILWAY CO.,LTD., Sunshine City, Junktudo Ikebukuro, RISO KAGAKU CORPORATION, Hoshino Resorts OMO5 Tokyo Otsuka

In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporate Taxpayers’ Association, Ikebukuro Nishiyauchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro, Hotel Grand City Ikebukuro, Ikebukuro Hotel Association, Sunshine City Prince Hotel, HOTEL RESOL Ikebukuro

PR Support: Poster Hari’s

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2020

Festival/Tokyo 2020 is organized as part of Tokyo Festival 2020.



フェスティバル/トーキョー20は東京芸術祭2020の一環として開催いたします。



本プログラムのアンケートにご協力を願います。アンケートフォームはこちら

Hand Saw Press

とびだせ! ガリ版印刷発信基地

ディレクション: Hand Saw Press

Hand Saw Press

Pop-up Riso Zine Studio

Artistic Direction: Hand Saw Press

Hand Saw Press

10.16 Fri – 11.15 Sun

ガリ版印刷発信基地、

ZINEスタンド、

Pop-up 印刷トラック、

Pop-up ZINEスタンド

Riso Zine Studio,

Zine Stand,

Pop-up Print Truck,

Pop-up Zine Stand

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル/トーキョー20 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO

個人の声が街を変え、公共空間を作る —— 2年目のガリ版印刷発信基地

野中モモノライター、翻訳家(英日)、ZINEのオンラインショップ「Lilmag」店主

2700人以上が訪れ、365点ものZINEを生み出したF/T19「ひらけ！ガリ版印刷発信基地」に続く本プロジェクト。ワイワイ集まって、作ったり、読んだり、交換したりしたいけど、今年は……？ 9月上旬。それでも、だからこそできる発信と交換の仕組みを準備中のHand Saw Pressに、ZINEのオンラインショップ「Lilmag」の店主でもあるライターの野中モモさんがインタビューしました。



昨年のフェスティバル／トーキョーで大盛況だったあのリソグラフ印刷工房が、今年も大塚の街に戻ってきます。「とびだせ！ガリ版印刷発信基地」は、普段は品川区西小山で営業しているリソグラフと木工のスタジオ「Hand Saw Press」がディレクションする、誰でも気軽にZINEの制作と発表ができるスペース。今年は大塚の基地に加え、印刷機を積んだトラックが街に飛び出し、Pop-up ZINEスタンドも豊島区内の公園や図書館に設置されるなど、参加者の密集を避けつつ新しい出会いを促す仕掛けを準備中なのだそう。

ここでまずZINEとは何かを改めて確認しておきましょう。ZINEとは一般に英語で「有志の個人または小さなグループによる非営利・少数の自主制作出版物」のこと。自主出版というと、日本ではミニコミ、同人誌、リトルプレスなど、さまざまな呼び名のもとに豊かな文化が育ってきましたが、それらと重なるものです。冊子になっているものもペラ一枚のものも、変わった形態のものも、無料配布されるものもお値段がついている本もあり。何をもち非営利とするのか、何部まで少数と言えるのか、はっきりと定義するのは無理だし、近年は有名人や企業がZINEと称して高価な出版物を出しているケース

もあるけれど、基本的には経済的な利益をあげることを目的とした商業出版や企業広報誌とは別の、小さな出版がZINEだと筆者は考えています。「上から下へ」「中央から周縁へ」のピラミッド構造を持つマスメディアとは異なり、ZINEは個人と個人がつながり、情報が横に広がっていくことを促します。「自分たちがやりたいからやる」DIY(ドゥ・イット・ユアセルフ)のオルタナティブ・カルチャーと共にある出版活動なのです。

こうした気軽な少数の出版によく利用されている印刷手段のひとつがリソグラフです。いわゆる「ガリ版」と同じ孔版印刷の原理を利用した、比較的安価にたくさんの枚数を刷ることができる、理想科学工業の簡易印刷機。ガリ版はロウ原紙に鉄筆で文字や絵を刻む(ガリを切る)手作業で原稿を作成しますが、リソグラフはその必要がなく、コピー機と同じような感覚で手軽に印刷することができます。日本では学校のプリントやチラシ印刷など身近なところで大活躍していますが、海外ではシルクスクリーンに通じる芸術的な表現手段として注目を集めており、アーティストが運営して作品制作に利用するリソグラフ・スタジオが世界各地に存在しています。

Hand Saw Pressの安藤僚子さんと菅野信介さんは、東京を拠点にこうした海外のリソ・シーンとつながり、自由な表現を応援するインディペンデントなリソスタジオとして活動を続けてきました。昨年の「ガリ版印刷基地」では、普段から職業としてアーティストを名乗っているわけではないかたがたの豊かな創作意欲におおいに刺激を受けたそうです。

安藤僚子(以下安藤) 「最初はみんなZINEなんて作ってくれないんじゃないかな？ 自分の想いを書くなると興味ない人が多いかな？ と思っていたんだけど、全然そんな心配いらなくて。会期が1か月あったんですけど、2週間を過ぎたぐらいからリピーターも増えてきました。たぶん地元のお母さんネットワークがすごくて。子どもと一緒に来たお母さんが保育園で『こんなのやってるのよ』って作ったZINEを見せるところからどんどん広がっていったり。ひとりで淡々と作って行って、おしゃべりはしないけどZINEの交換はやたらしてってくれるおじさんがいたり。みんなのモチベーションの高さに感動したっていうのはありましたね」

菅野信介(以下菅野) 「最初はみんなZINEを作る



ワークショップとかもやってたんですけど、それが全然必要じゃないっていうぐらい常に人が来るようになりました。こっちがそんなに用意しなくても楽しんでくれるようになったのは嬉しい誤算というか。もちろん最初にイベントをやったから来やすくなったのかもしれないけど、アーティストを呼んでそのファンが来る、みたいな感じではなくて、純粋にそういう作る行為を楽しんでくれる人が多かった」

ガリ版印刷基地は大塚駅南口のサンモール大塚商店街に入っすぐというロケーションも魅力的です。古くからの個人商店が残り、さまざまな文化的背景を持つ人々が行き交います。昨年、訪れた人々が制作したZINEで埋め尽くされて壮観だった角のスペースは、今年も同じように開放される予定。リソグラフ印刷機を設置していたスペースでは、今年の春から新しいカレー屋さん「トミヤマカレー」が営業しています(昨年のガリ版印刷発信基地のイベントが店主さんと物件の出会いのきっかけとなったそう)。その代わり今年、一本裏の路地にある元食料品店の物件を借りることができました。

安藤 「斜め前が昔からやっていたような魚屋さんで、八百屋さんとお蕎麦屋さんもあって。去年、商店街のかたがたとつながりができたので、ご紹介いただきました」

菅野 「去年は印刷が追いつかないぐらいに人が来てくれて、最後のほう僕は印刷のオペレーターみたいな感じになってた。今年は、スタッフも増やして、作り手のかたともうちょっとコミュニケーションが取れるといいな、と思ってたんですけど、人が集まるのが難しい状況になってしまって……。密にならないような対策をしたうえで、来て楽しんでくれたらいいなと思います」

今年の新しい試みとして導入されるのが、Pop-up 印刷トラックと Pop-up ZINEスタンド。印刷機を載せる軽トラックの荷台部分の小屋のような構造と、それぞれの設置場所に合ったスタンドが制作されます。安藤さんは空間デザイナー、菅野さんは建築家としてお仕事をしていますから、そうした作業はお手の物でしょう。

安藤 「去年の感じだと人がいっぱい来て密になっちゃうから、どうやって人を分散させたらいいかなと考えて。去年は理想科学工業さんがリソグラフを1台貸してくれたんですけど、それだけでは足りないくらい盛況でした。なので2台目、普段使っているインクのドラムが2個入る印刷機でなくて、単色の小さいやつを自分たちで買ったんですけど。それは大人が3人、4人ぐらいいれば上げ下ろしができる。それをトラックに積んで、公園とかいろんなところに出張するのがいいんじゃないかっていうアイデアが今回のはじまりでした。だったら大塚だけでなくいろんなところにPop-up ZINEスタンドを設置しようということで、その場所を探しました」

前はまさにみんなが集まる基地だったのが、今年はいろいろな場所にZINEを届けるディストリビューション(流通)のはたらきも担うようになるのです。豊島区内に加え、小田晶房さんが運営するHand Saw Press京都をはじめ、東京の外のスペースとの連携も図ります。作者の肉体から離れ、時間と空間を超えてそっとメッセージを伝える、ZINEのメディアとしての力が改めて浮かびあがることになりそうです。

安藤 「Pop-Up ZINEスタンドは豊島区内の10何か所かに設置されるんですけど、バンド仲間だったバイクメッセンジャーのYukiさんがそこをずっと回って原稿の回収とZINEの配布をしてくれるんです。トラックの運転手は、劇団『ままごと』のプロデュースをやっている宮永さんが担当してくれます。演劇の人たちって、人を前にしたときのホスピタリティが半端ない。その人たちのアドバイスも自分たちには無い目線だったりするので、それも刺激になっています」

公園や図書館などでの出張営業の実現には、豊島区の文化デザイン課が協力してくれたとのこと。これまでインディペンデントに活動してきたHand Saw Pressとしては、そうした公共の場に積極的に介入していくのも新たな挑戦です。



安藤 「いま東京では、オリンピックが予定されていたというのがあるって、パブリックスペースの開発が進んでいますよね。街がどんどんきれいになって、それは悪いことじゃなくていいことなんだけど、同時に不安もあります。マジョリティな人たちが楽しめる場みたいなものは増えてるんだけど、公共の場ってそうじゃない、もっとボーっとした人も居られる場所であるべきなんじゃないか？ って。そういうところに自分たちがトラックと一緒に出ていってどんなことになるのか、なんとなくソワソワするというか。もちろんいつもと違う場所でどんな人と出会えるのか楽しみなんですけど」

菅野 「僕は割と楽観的というか、『こうあるべき』みたいなのがあんまり無いプログラムだし、参加人数が何千人だったから成功とかそういう話でもない。個人が作るものをメインに置いているので、それをなるべく全部掘り上げるようにしていれば、楽しいZINEはいっぱい出てくるかなって感じはします。『取っていいフリーペーパーがたくさんある』みたいな感覚で終わらずに、自分も何か書いて発信して交換できる喜びみたいなところまで楽しめる人が今年も出てくるといいな」

舞台芸術のフェスティバルにZINEの印刷所を設けるといのは、異色の試みに違いありません。しかし、限られた数の人々が同じ時間と空間を共有する演劇やダンスのパフォーマンスと、ひとりひとりが小さなメディアを介して場を作っていくという行為には、確かに通じるものがあるように思います。どんなふうにも活用するかはあなた次第。期間限定で出現する新しい情報の流れは、誰もが心に秘めている創作意欲を刺激して、見慣れた街の風景に新鮮な空気を吹き込んでくれることでしょう。



【参加方法】

①サンモール大塚商店街内にある「ガリ版印刷発信基地」や、豊島区内各所に出没する印刷トラック、ZINEスタンドのいずれかでZINEキットのフォーマットを入手し、各々好きなZINEを作成してください。

②ZINE原稿が完成したら、「ガリ版印刷発信基地」か印刷トラックに預けるか、ZINEスタンド脇のポストに投函。後日、「ガリ版印刷発信基地」や区内・全国各所にあるZINEスタンドに置かれます。自分のZINEがどこに置かれているかはお楽しみ！

※ZINEを通した参加者の表現や発信、交換を目的としたプログラムのため、できあがったZINEは交換され次第なくなります。予めご了承ください。
※「ガリ版印刷発信基地」は、混雑時には入場制限を行う場合がございます。

【参加費】

ZINE作成 A4(ペラ/2つ折り)2版まで無料(1人1日1回まで)

詳しくは <https://www.festival-tokyo.jp>



Hand Saw Press (安藤僚子、菅野信介)

リソグラフの印刷機と木工工具のあるDIYスペース。建築家の菅野信介(アマラフ)、空間デザイナーの安藤僚子(デザインムジカ)、食堂店主の小田晶房(map/なぎ食堂)という、バックグラウンドも得意分野も異なる3人が、東京と京都の2拠点で活動。本やZINEの出版、ポスターやアートブックの印刷、日曜大工など、場所とツールを町にひらくことで、人、都市、世界のいまにつながるものづくりを続ける。